

しろあとだより

第 12 号

2016 年 3 月

高槻市立
しろあと歴史館

「大坂古城之図」と真田丸への雑感

中西 裕樹

はじめに

しろあと歴史館では、「大坂古城之図」という資料を所蔵している(図1)。江戸時代の刷物であり、慶長十九年(一六一四)に起きた大坂冬の陣の一種

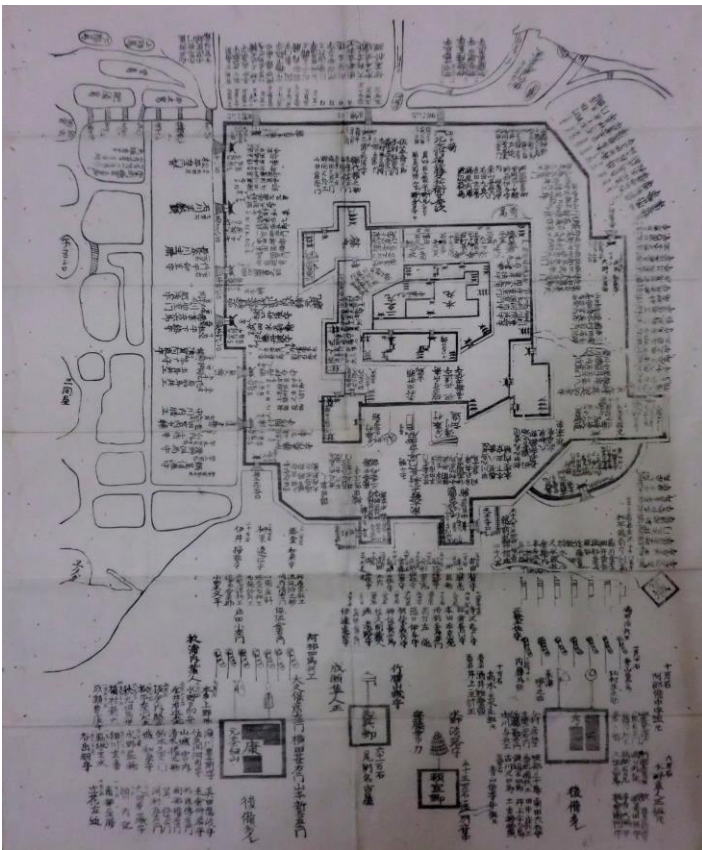


図1 「大坂古城之図」

目次

「大坂古城之図」と真田丸への雑感 中西裕樹	1
「江戸時代中後期の高槻藩分限帳(高階家文書)について」(一) 西本幸嗣	6
「歌舞伎「名作切籠曙」と「高槻の刃傷事件」について」 清水亜弥	16

の配陣図である。武将の名前などとともに、豊臣期大坂城の構造が確認でき、有名な真田丸の形も認められる。

そこで、小文では、本図の紹介を行うとともに、近年、大きく研究が進展している真田丸に関する雑感を述べたい。

一 「大坂古城之図」について

「大坂古城之図」(以下「古城図」)は、縦五九・七cm×横五〇・〇cmの法量であり、折りたたまれて縦二五・〇cm×横一〇・六cmの袋に収められる。直接、製作された年代などが推定できる記述はない。

「古城図」は、大坂城の中心部と惣構を上方に配置する。およそ図が対象とする範囲は、北は城と大川などの河川を挟んだ、現在の大阪市城東区蒲生から大川河口部の「中之島」「堂島」「肥後寫」まで、西は西区江之子島から木津川周辺のデルタ地帯、南は四天王寺から阿倍野あたりまで、東は上町台地の縁辺部である。この地形の上に、数多くの豊臣方と徳川方の武将の名前が配されている。

「古城図」の大坂城は、本丸の西側に「二之丸」という曲輪が配置し、南の一段低い帯曲輪状の空間を介して「千ジヨウ舗」という名の曲輪がある(図2)。徳川幕府の京都大工頭であった中井家が伝えた「豊臣時代大坂城指図」(中井正知・正純氏蔵などから明らかになる豊臣大坂城の構造は、本丸と二ノ丸が並立するようなものではない。ただし、本(詰)丸は二重に帯曲輪が取り囲み、「古城図」の二ノ丸は西側の帯曲輪を拡大解釈したものと読める。

また、城郭中心部を囲む外側の墨線からは、北西、南西、南東で曲輪が張り出している。これらは慶長三年(一五九八)以降に三ノ丸の中に構築された馬出曲輪であり、「古城図」はその姿を比較的正確に伝えている。馬

出とは、城内から見て、堀の対岸に設けられた曲輪のことで、城内から外部へ攻撃を加える場合の橋頭堡としての機能を持つものを指す。なお、「古城図」の範囲には城下町が存在したはずだが、その街区に関する情報は無い。

二 「大坂古城之図」の評価

大阪教育大学附属図書館のデジタルコレクションでは、この「古城図」とほぼ同じ内容の資料が公開されている(以下「大教図」)(1)。実見はできていないが、画像からは「古城図」と同様に刷物であるように見える。両図とも、一定数が出回った大坂冬の陣に関する刷物なのだろう。

ただし、異なる点もあり、「大教図」の法量は縦六四・〇cm×横四二・五cmと、「古城図」の法量とは一致しない。また、「大教図」には大坂城北東城外に記号化された「付城」の表記があるが、「古城図」はこの部分の

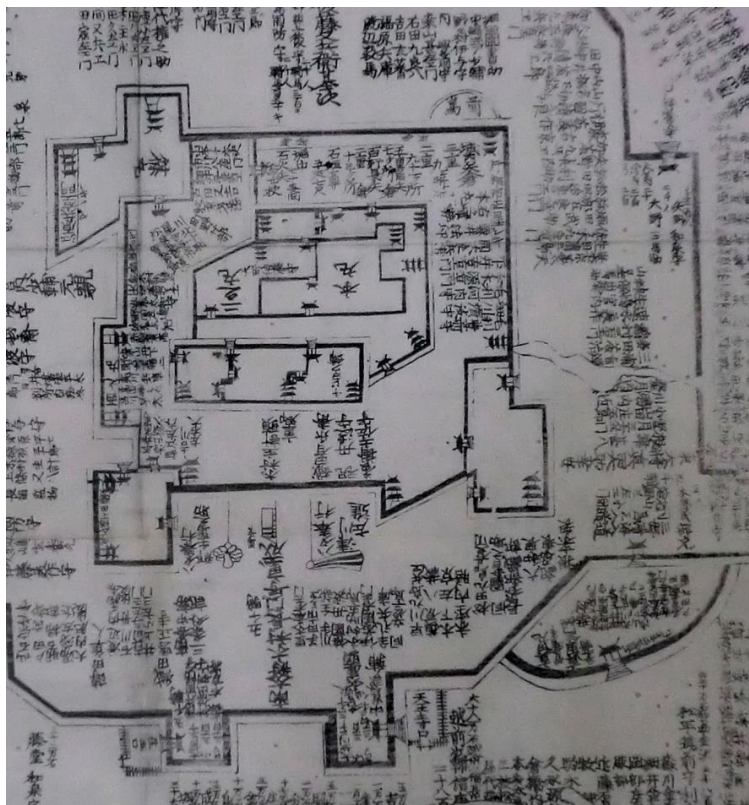


図2 「古城図」の大坂城中心部分

紙が欠損した表現をとる。

「古城図」には他にも虫損の表現があり、「大教図」に経年変化を加えたかのような印象を受ける。真偽はともかく、「古城図」を手にとった人々は、何か古い資料を下にした版の刷物という印象を受けたのではなからうか。「大教図」よりも凝ったものに見せよう、という意図を感じる。

さて、豊臣期の大坂を描いた絵図とされるものは、大きく3つのグループに分類されており、このうち第二種を代表するのが中井正知・正純氏蔵「慶長十九年甲寅冬大坂絵図」である(2)。静嘉堂文庫蔵「摂州大坂城攻守図」とほぼ同一の配陣図であり、城郭の構造は浅野文庫所蔵『諸国古城之図』『大坂惣構』、金沢市立図書館蔵「摂州大坂古城之図」とほぼ一致する。これらには、同一の底本の存在が想定されている(3)。

第二種の絵図類は、大坂城と惣構を上部に配し、南の四天王寺付近までを範囲とする一方、その内部に展開していたはずの城下町の街区を描かないという特徴があるものの、全体として概ね豊臣大坂城の構造を正確に描くと評価される。ただし、本丸西側に二之丸が並立する構造であり、デフォルメが加わっている。

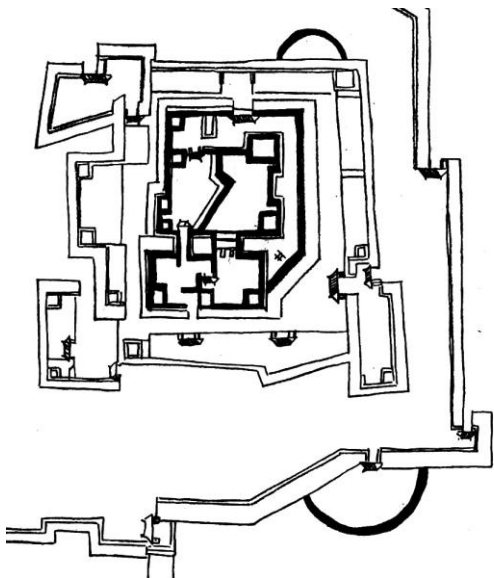


図3 「慶長十九年甲寅冬大坂絵図」を中西がトレース(部分。文字除く)

これらの特徴は「古城図」と近似するものであり(図3)、馬出曲輪や惣構も同様に構造が類似する。馬出曲輪の文字は「古城図」の「篠丸」が「慶長十九年甲寅冬大坂絵図」では「惣丸」、同じく「織田上野ヤシキ」が「織田上野介屋敷」と大差が無く、図が対象とする範囲や城下町の街区を描かない点、武将の陣所の位置なども非常に近い。「古城図」が、第二種の絵図類の流れにあることは間違い無いだろう。興味深いのは、

絵図の袋に「売買不許」の文字があり(図4)、本図の「元茶臼山」とある徳川家康の陣は文字を墨で消して「家」の文字だけが見えるようにし、同じく徳川秀忠の陣は「秀」の文字だけが見えるように細工がなされた点である。

徳川家を憚っているようにもみえるが、徳川頼宣ら御三家の人物の名は記されている。將軍家の陣所を暗に示すような機密性をうかがわせているようにも受け取れ、先の「大教図」との差異を含めて、底本に付加価値を付けようとしているのではなからうか。刷物という性格を含め、これらの細工によって購買意欲を高めようとしていたのかもしれない。

「古城図」が持つ、資料的な希少性は決して大きいとはいえない。ただし、底本は、これまで大坂城の研究に用いられてきた絵図類に連なるものが可能である。大坂城や惣構の形を一定とらえているものとして、評価することが可能である。

三 「大坂古城之図」の真田丸

「古城図」には惣構南東に接して、半円形の曲輪がある(図5)。これが「真田丸」であり、「真田左衛門佐幸村」「五千騎」などの文字が他の武将の名前とともに見られる。墨線を挟んだ惣構には門が描かれており、曲輪の機能としては馬出にあたる。

城郭研究では、馬出の形状には大きく二つのパターンがあり、半円形のもの「丸馬出」、四角いものを「角馬出」と呼ぶ。このパターンは、戦国大名の城郭構造の特徴として理解され、丸馬出は武田氏の特徴として理解されている。「古城図」の真田丸は、丸馬出の形状である。

戦国大名と城郭構造の特徴をめぐっては、検証方法に大きな課題があり、

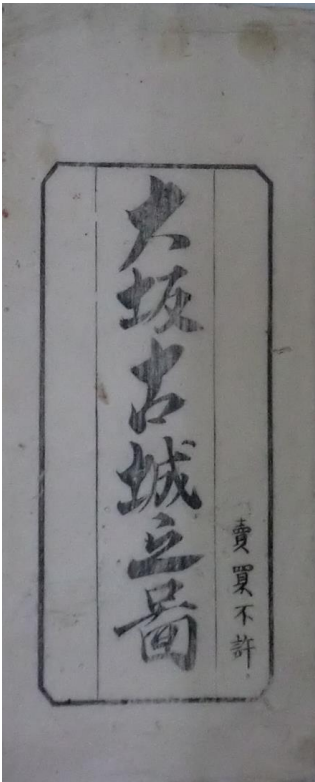


図4 「古城図」の袋

両者を単純に結びつけることはできない。ただし、真田丸に入ったのは真田信繁(幸村)であり、真田家は武田家の武将であった。このため、真田丸は丸馬出であり、真田信繁が武田氏の築城技術を用いたとの評価もなされている(4)。

近年、真田丸の研究が飛躍的に進み、様々な復元案が提示されるに至った。その結果、真田丸の形状は丸馬出ではなく、惣構内部との間に清水谷という約二〇〇メートル規模の自然の谷を挟むなど、そもその馬出という評価が妥当ではないことが指摘されている(5)。規模や位置なども従来の真田丸の推定とは大きく異なり、独立的な出城としての評価が進みつつある。筆者は、これらの復元案を論じるだけの立場には無いが、概ね単純な丸馬出ではないという結論には賛成したい。

また、近世の城郭図は、軍学の影響を強く受けており、特に真田丸は武田信玄の戦法を対象とする「甲州流軍学」の創始者で、「真田丸馬出の下へ押し寄せ」と記し、大坂の陣に従軍した小幡景憲を通して丸馬出という形が印象付けられた(6)。直接的ではないにしても、「古城図」の真田丸の形が事実と齟齬することは容易に想定できる。

ただし、第二種とされる絵図の浅野文庫所蔵『諸国古城之図』『大坂惣構』の形状が丸馬出であるのに対し、同じ浅野文庫が所蔵し、真田丸の復元の基本資料として注目されている『同』『真田丸』が現地踏査をふまえた方形に近い複郭の表現となるのは、前者が小縮尺、後者が大縮尺の図として作成された事情が反映しているのではなからうかとの指摘もなされている(7)。また、そもその真田丸周辺の地形は、惣構の大規模な谷地形を背にして、大きくは南に円弧状にふくらむような条件にあるようにも思う。



図5 「古城図」の真田丸周辺

「古城図」には、本丸を取り囲む外側の墨線の北に接して、

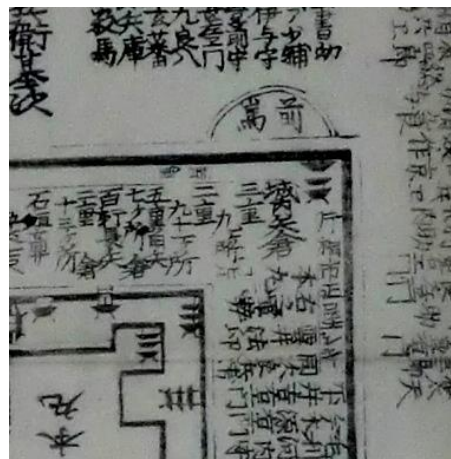


図6 「古城図」の「前寫」周辺

「前寫」と記入された円形の曲輪が見える(図6)。この曲輪は『諸国古城之図』『大坂惣構』にはないが、「慶長十九年甲寅冬大坂絵図」には描かれている。徳川大坂城では青屋口という虎口が設けられた場所であり、大坂の陣に際して、丸馬出が構築されたとの解釈も可能である(8)。

一方、「前寫」とは、幅約一〇〇〜七〇mの二ノ丸の水堀にあった「鷺島」という島のことであり、エッゲンベルグ城が所蔵する「豊臣期大坂図屏風」には、堀の中に一匹の鷺とともに複数の美しい樹木が植えられた様子が描かれている(9)。先ほどの縮尺の視点から理解すると、こちらにも縮尺の都合上、結果として島の形状が丸馬出状となった可能性があるだろう。また、陣に際して鷺島が馬出に改修されたことも想定できる。

「古城図」の真田丸についても、単に不正確とするのではなく、その背景を探る作業が大坂城の構造を考える作業にもつながるように思う。

四 真田丸研究の意義

近年の真田丸研究は、大坂城の構造を考える作業でもある。これまで真田丸武田丸馬出と理念的に解釈してきた構造に対し、精緻な地形の把握と絵図を用いた成果は、より客観的な作業を進めたことになり、大坂の陣という未曾有の合戦に際しての惣構のあり方を問い、大規模合戦への視野を開いたことに大きな意義がある。今でも人気の高い、真田信繁という武将の再評価へのきっかけにもなることは間違いない。

ただし、丸馬出ではない、という一面が強調されすぎることには、若干の違和感がある。真田丸がそれ独自として研究される機会は、これまで少なかったわけだが、大坂城研究の中では惣構の復元に関する研究史があり、その中で真田丸を丸馬出とする評価は意外に見受けられない(10)。例えば、豊臣期大坂城の構造を考える上での画期となった渡辺武氏の研究におい

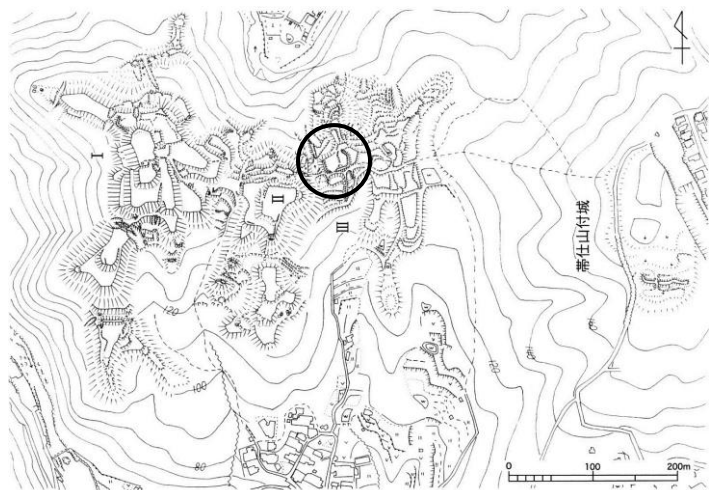


図7 芥川山城跡 概念図(中西作図。○が該当の曲輪)

て、真田丸は「南惣構の塹壕状空堀部分を補強し、惣構南東部から敵の侵入を防ぐ」とされている(11)。

また、「孤立無援の砦」的な評価については、戦国期の城郭史との接続を図る必要があるように思う。大坂の陣には種々の記録があり、結果として真田丸の戦いについて論じることができるが、城郭の範囲を決定する堀切などの防衛ラインの外側に存在する、独立的な曲輪は戦国期山城においても確認できる。

極端な事例となるが、例えば本市の芥川城(芥川山城跡)では、東側が地形続きとなるために、これを遮断する多重堀切を設けている。これより西側が狭義の城域であり、まとまった面積を持つ曲輪が存在するが、多重堀切の東側には土塁囲みの曲輪がある(図7)。この周辺は粗雑な削平地が存在するものの、狭義の城郭から見れば「城外」にあたる。この意味において、そのロケーションは「真田丸」に近いとも受け取れる。

同様の曲輪を持つ戦国期の城郭は、意外に存在するのではないだろうか。戦国期の城郭において、実際の武将の動きなどを示す史料は限られる。この点で、真田丸は貴重な事例となるが、城郭史における構造を考えるという点では検討の余地がない訳ではない。これらの点をふまえた上で、真田丸周辺の研究は、それ自体に特化することなく、中世城郭史全体の流れの中での理解を進める必要があるように感じる。

また、真田丸と真田信繁との関係にも慎重を要する。例えば『大坂日記』には、後藤又兵衛が出丸(真田丸)を取り立てた後、信

繁が自分は兄が徳川方であるため秀頼から疑われているため出丸を守ると秀頼も安心すると申し出たとある。『大坂日記』が信に値するという訳ではない。しかし、このような記述は、真田丸を真田信繁だけに惹き付けることへの警鐘とも読めるのではなからうか。この記事は、大坂城研究の金字塔である櫻井成廣氏の著作ですで紹介されている(12)。

また、櫻井氏の著作では『大坂陣山口休庵咄』を取り上げる。ここでは、確かに「真田左衛門ハ如何存候玉造口の御門の南、東八町の御門の東に一段高き畑御座候を三方にから堀を掘り堀を一重かけ、堀の向とから堀の中に堀際に柵を三重に付、所々矢倉井楼を上げ堀のうで木の通りに幅百尺の武者ばしりをいたし父子の人数六千人にて籠申候。是を真田が出城と申し候」と信繁が築城したかのように記している。『大坂陣山口休庵咄』は、大坂の陣に関してよく使われる文献の一つである。

しかし、興味深いのは『大坂陣山口休庵咄』が「東八町目の御門より真田出城へ寄せ申候敵へ横矢(射)申候」と記すことである。真田丸は孤立無援ではなく、惣構内部からの援護を受けていた。真田丸の性格を強調し過ぎることなく、その構造や関連文献を検討することが、真田丸に加えて大坂の陣や城郭の実態に迫ることを可能にするように思う(13)。

おわりに

小文では、「古城図」に若干の考察を試み、そこから真田丸などへの雑感を述べてきた。少しでも研究に供するところがあればと願うばかりである。

また、今回は取り上げることができなかったが、「古城図」には数多くの武将の名前が書き込まれている。その中でも二ノ丸の南の「ハタ奉行」で千成瓢箪の横の「郡主馬之助」、「津川左近」の名が目立っている。この両名の表現は、他の第二種の絵図の大半には認められないが、大阪城天守閣蔵「大坂冬夏陣立図」には、丁寧な彩色された瓢箪の脇に彼らの名がある(14)。他にも、「古城図」には強調して書き込まれた武将たちがおり、機会を得て武将名が強調された背景なども考えてみたい。

【註】

(1) <https://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/digital-collection/index2.html>

(2) 大澤研一「補論「豊臣期大坂城下町図」について」(大阪市立大学豊臣期大坂研究会編 大澤研一・仁木宏・松尾信裕 監修「秀吉と大坂城と城下町」、和泉書院、二〇一五年)。

(3) 中井均「大坂城の縄張り」(註2「秀吉と大坂城と城下町」)。

(4) 註3中井論文など。

(5) 坂井尚登「大坂城真田丸・絵図・地形図・空中写真によって考察する位置と形状」(日本城郭史学会編『城郭史研究』34、東京堂出版、二〇一四年)、千田嘉博「真田丸の謎戦国時代を「城」で読み解く」(NHK出版新書、二〇一五年)、積山洋「大坂城惣構南面堀と真田丸」発掘調査からみた復原」(『真田歴史読本』、KADOKAWA、二〇一六年)、市川創「真田丸の具体像に迫る」(大坂城豊臣石垣公開プロジェクトホームページ、二〇一六年)など。

(6) 北垣聰一郎「豊臣時代大坂城「本丸図」と「真田丸」について」(岡本良一編『大坂城の諸研究』、名著出版、一九八二年)。

(7) 坂井尚登「真田丸を復元する」(歴史群像編集部『学研ムック 真田戦記』、学研プラス、二〇一五年)。

(8) 註3中井論文。

(9) 『豊臣期大坂城屏風』(大阪城天守閣、二〇〇九年)。

(10) 積山洋「豊臣氏大坂城惣構南面堀の復原」(渡辺武館長退職記念論集刊行会『大坂城と城下町』、思文閣出版、二〇〇〇年)、市川創「豊臣期大坂城惣構南面堀の復元とGISによる土量計算の試み」(『織豊城郭』15、織豊期城郭研究会、二〇一五年)など。

(11) 渡辺武「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構について」『徳台武鑑』所収「大坂冬の陣配陣図」を中心に(註6『大坂城の諸研究』)。

(12) 櫻井成廣『豊臣秀吉の居城 大阪城編』(日本城郭資料館出版会、一九七〇年)。

(13) 訓原重保氏は、他の豊臣方の出城群と比較検討を行っており、注目される。豊臣方の出城は合戦で取り上げられることはあっても、研究の狙上へのぼることはなかったように思う。訓原重保「真田丸の攻防」(笹本正治監修『資料で読み解く真田一族』、郷土出版社、二〇一六年)。

(14) 『浪人たちの大坂の陣』(大阪城天守閣、二〇一四年)。

江戸時代中後期の高槻藩分限帳（高階家文書）について（二）

西本 幸嗣

しろあとだより第九号（平成二十六年十月）「江戸時代中後期の高槻藩分限帳（高階家文書）について」（1）で紹介・翻刻した「高槻藩分限帳」の積文の続きを掲載するものである。

納戸

金九両三人扶持

大山貞八

七両三人扶持 納戸役

栗岡伊兵衛

拾石三人扶持 納戸役

井出郡治

役扶持二人ふち

金七両三人扶持
米七石三人扶持

納戸役

● 柴崎文蔵
谷口繁右衛門

右筆

金七両三人扶持
金七両三人扶持
金七両三人扶持
金七両三人扶持
金七両三人扶持
金七両二人扶持
米五石二人扶持

日記役

右筆之御席

古沢茂市
伴野常右衛門
杉浦幸助
宇野与右衛門
水尾辰次
阿井市助

供頭

金九両三人扶持

弥之助様付

平木半六

供頭

金九両三人扶持

御刀番兼

堀権左衛門

役料銀二枚御在府之節取斗被成被下候

金九両三人扶持

御広間番

高屋新蔵

金九両二人扶持

供頭

松下隼太

御刀番兼

金七両三人扶持

台所人

供頭之席

小宮山金内

金九両三人扶持

供頭

千馬恒助

御刀番兼

金七両二人扶持

供頭格

供頭末座

高木嘉兵衛

金七両三人扶持

金払

伊藤幸八

金七石三人扶持

供頭格
御部屋ふち

石田友八

中小姓

七両三人扶持

金払

● 下村惣八

七両三人扶持

大学様附
中小姓之席

金子治助

七両三人扶持

普請奉行
大学様附

● 高橋太次兵衛

七両三人扶持

● 村中半助

七両三人扶持

● 山本瀬兵衛

七両三人扶持	中小姓	●	村上源吾
七両式人扶持	中小姓		岡田文平
七両三人扶持	中小姓		伊藤朴助
八石三人扶持	中小姓		長谷川弥右衛門
七両二人扶持	中小姓	●	福田文之助
七両三人扶持	中小姓		藤田文次
七石三人扶持	中小姓		仙石金吾
七両二人扶持	中小姓		池田弥太郎
七両二人扶持	中小姓		川嶋楯八
七石三人扶持	中小姓之席		石村忠左衛門
米拾石三人扶持	日記役		廣瀬門太夫
	中小姓格		
	三ノ丸預り		
惣領			
文左衛門子	芥川文吾		
権兵衛子	田中縫殿		
安右衛門子	片岡金次郎		
浅右衛門子	猪瀬二良		
弥七右衛門子	長束一二		
武兵衛子	沢路廣弥		
与一右衛門子	田中勝次郎		
奎右衛門子	桑田岩次郎		
弥一右衛門子	関羊助		
藤左衛門子	小倉小隼		
太郎左衛門子	柘植常之助		
文太夫子	橋本勝之進		
半太夫子	田村辰弥		
久右衛門子	曾我莊藏		
庄兵衛子	沢田信右衛門		
市兵衛子	飯尾為次郎		
次郎兵衛子	加藤友五郎		
次郎左衛門子	白井素助		
清兵衛子	猪飼只五郎		
莊全子	菊地玄碩		
弥右衛門子	北嶋和五郎		
金七両三人扶持	中小姓格 並		
御下屋敷	中小姓並		
扶持方渡	樹木方		小川岩右衛門
金七両三人扶持	上様附		福嶋市右衛門
御下屋敷	内廻り		
御書方見習	御下屋敷		木村久右衛門
見付番 中小姓並	芳寿院様附		
台所人	●		山本重左衛門
お喜井様付 ●	●		平井喜右衛門
御部屋重り	中小姓並		
見附番	小宮山槌藏		
八木友右衛門	岡伴次郎		
高野清助	岡田兵七		
佐藤治右衛門	八木友右衛門		
清水忠藏	高野清助		
御扶持方渡	見附番		
米六石式人半扶持	中小姓並		

郡方勘定人 並河作兵衛
御用金方兼
中小姓並
水道奉行 恒見万太夫
帶刀様御附

金七兩三人扶持 高井与七
金六兩三人扶持 御台所人 下村幸次
金六兩三人扶持 茶道 坊主頭 竹原昌知久
金七兩三人扶持 見付番 松井忠次
米七石三人扶持 山廻り役

金五兩二人扶持 茶道 川畑郷右衛門
金六兩二人扶持 日記 小林宗丞
銀五枚二人扶持 醫師 黒野元右衛門
金七兩三人扶持 勘定人 増田通厚
柴崎喜太夫

七兩三人扶持 高橋幸右衛門
七兩三人扶持 同 岸 益次郎
七兩三人扶持 同 大藪九郎兵衛
七兩三人扶持 同 八木浅八

歩行目付 歩行目付

外、五十目預り 見附番
式百五拾目式人扶持 池尻八太夫
四石五斗式人扶持 河合玄助
式百五拾目式人扶持 小沢平兵衛
式百五拾目式人扶持 谷口金蔵
式百五拾目式人扶持 見目甚太夫
金五兩式人扶持 松下忠左衛門
式百五拾目二人扶持 正木四郎左衛門

歩行之席

米六石二人扶持 物書 柴田幸蔵

銀式百五拾目式人扶持 歩行 小沢伊三次郎

銀式百五拾目式人扶持 歩行 杉浦五市

銀式百五拾目式人扶持 歩行 乾 小弥太

銀式百五拾目式人扶持 歩行 栗岡文六

銀式百五拾目式人扶持 歩行 伊藤只次

銀式百五拾目式人扶持 歩行 土屋重三郎

銀式百五拾目式人扶持 物書 檜山権蔵

銀式百五拾目式人扶持 歩行帳付 ●源田与兵衛

銀二百五十目二人扶持 大山武次

銀二百五十目二人扶持 松岡平次

銀二百五十目二人扶持 桂川兵左衛門

米六石二人扶持 鈴木常七

銀二百五十目二人半扶持 安井郡蔵

金四兩式人扶持 御使口歩行 羽鳥清五郎

金五兩式人扶持 御使兼御馬方 植村観次

歩行並

六兩三人扶持 郡方勘定人 河井六右衛門

三兩三人扶持 山廻り 歩行並 中西伴内

茶道 ● 坊主頭 歩行並 山口友八

四兩式人扶持 会所勤 歩行並 奥野八左衛門

式百目式人扶持 女中賄方錠口番兼

三兩式人扶持 歩行並 内田茂兵衛

五兩三人扶持 細工人 同 上田良七

金四兩式歩式人扶持 歩行並 御帳附 ●山口丈八

奥様附

金三兩式歩三人扶持 同 ●佐藤友左衛門

御廣式番
歩行並
御下屋敷 ● 内嶋谷右衛門
内外とり下目付兼

金四両三人扶持
鍵小奉行
物書
小曾根権蔵

四両式人扶持
同
奥様付
市川弥六

四両式人扶持 ●
御廣式番
歩行並
物書
山田良助

四両式人扶持 ●
物書
扶持方渡
中西喜太夫

五石式人半扶持
歩行並 扶持方渡
坂口喜左衛門

四両式人扶持
芳口□様 歩行並
布留川甚助

五石式人扶持
料理人 ●
清水村右衛門

見付番
歩行並
見付番
中村次助

一米六石三人扶持
歩行並
大工
小串藤九郎

一金三両式人扶持
歩行並
見付番
山田才次

下屋敷 歩行並
金三両二歩三人扶持
扶持方渡
久保友七

樹木方
歩行並
御広敷番 ● 土田要七
茶道

金四両二人扶持
坊主小頭
小川勘助

金四両二人扶持
留守居下役
中田理兵衛

金四両式人扶持
役金二両ツゝ
茶道 歩行並
越知扇斗

銀二百五十匁二人半扶持
歩行並
普請小奉行
富田十蔵

米七石式人半扶持
普請小奉行
竹村儀平太

金三両式人扶持
歩行並
金方 勘定人
清水俊蔵

金四両式人扶持
歩行並
無方 渡方 ● 濱田藤蔵

銀二百五十匁式人扶持
歩行並
小屋奉行
南岡藤助

米七石式人半扶持
小奉行兼
歩行並
三上喜多右衛門

普請小奉行
歩行並
見付番
石田清兵衛

金三両三人扶持
見付番
堀江□□

米七石式人扶持
見付番
歩行並
若林左次

金四両式人扶持
物書
歩行並

金四両式人扶持 ●
庖丁代式両
池谷五兵衛

米六石式人扶持
歩行並
三ヶ山庄助

物書
歩行並

金四両式人扶持
物書

米六石式人扶持
台□方
上村多七

物書
歩行並

物書
歩行並

米四石式人扶持 元方 勘定人 步行並 小曾根林次

金四兩式人扶持 会所渡方 步行並 山本要藏

金四兩式人扶持 大学様付 長濱立兵衛

銀百八十匁式人扶持 坊主組 上村曾平

金三兩式人扶持 坊主組 道具代式兩 ● 木村五兵衛

銀百八拾目式人扶持 帶刀様附 ● 山下千次

米七石式人扶持 御土藏番 高屋宇右衛門

米二石二斗壹人半扶持 坊主組 久保友嘉

米二石二斗壹人半扶持 時々太鼓打 竹嶋太兵衛

前口之通、四人へ相成、御宛行右之通

米七石式斗壹人半扶持 太鼓打 小瀧仁兵衛

銀百八拾目式人扶持 坊主組 大工 上田文内

御土藏番

銀百八十匁式人扶持 坊主組 内田茂七

銀百八十匁式人扶持 坊主組 中村定助

銀百八十匁式人扶持 坊主組 氏原和全

銀百八十匁式人扶持 同 原沢忠八

銀百八十匁式人扶持 同 土田関齋

御目見無之小役人

米七石式人半扶持 足輕目付 小山儀平

米七石式人半扶持 同 市村徳太夫

米七石式人半扶持 同 久保田嘉太夫

金三兩二步式人半扶持 同 酒井新六

金三兩二步式人半扶持 同 沢野茂八

銀二百目二人半扶持 中間頭 坂口太次兵衛

金三兩式步式人半扶持 中間頭 藤本茂右衛門

金四兩三人扶持 中間頭 小山半兵衛

銀二百目式人半扶持 同 佐藤善次郎

金三兩式步式人扶持 買使 藤本玄藏

金三兩式步式人扶持 同 佐藤うの助

金三兩三步二人扶持 火奉行 ● 高田藤右衛門

金三兩式人扶持 御土藏番 奥田長右衛門

銀百八十匁式人扶持 出居方 橋長甚助

五石式人扶持 出居番 桐山團之右衛門

五石式人扶持 右同 市岡團六

米五石式人扶持 大工 梅蘭九兵衛

金四兩式人扶持 大工 常見庄藏

式百四拾匁式人扶持 やね方 梅田五兵衛

五兩三人扶持 大工 原沢与右衛門

金四兩式人扶持 右同 ● 星野伊兵衛

米五石式人扶持 役筋格式御取上ケ 山口重兵衛

銀百八拾目式人扶持 左官 南岡殿七

銀百八拾目式人扶持 大工見習 北村弁之助

式百四拾匁式人扶持 同 梅田定七

老人扶持 右同 上田源次

三兩式步式人扶持 厩小頭 森元樞右衛門

式百匁式人扶持 厩小頭 辻茂八

京屋敷

步行席植村官次之次

金四兩式人扶持 京扶持方渡し 宮本小六

米五石式人扶持 物書 清水金平

百八拾目壹人扶持 ツゝ 足輕三人

百三拾目老人扶持 花畑 庄九郎
老貫式百目六拾目 京中間拾人

内一人ハ駕籠之者、股引代拾六匁
式人ハ駕籠之者、股引代拾六匁

一米八拾八石 小森三郎左衛門組

三拾老人扶持 長谷川甚平

御先手組小頭七石三人扶持

平六石式人扶持拾老人

御旗組五石式人扶持三人

一米六拾九石三計 猪瀬浅右衛門組

式拾五人扶持 七石三斗三人 中西六左衛門

扶持小頭老人

小頭■拾老人 四石式人扶持 定番式人

六石式人扶持 平九人

一右同 高津宇兵衛組 梅蘭龜右衛門

一右同 橋本文太夫組

一右同 芥河清太夫

長束弥七右衛門組

一右同 瀧山平六

堀内半右衛門組

一右同 河合仁左衛門

柘植太郎丞組

一右同 荒木茂太夫

沢路武兵衛組

一右同 片山林右衛門

小倉藤左衛門組

一右同 伊藤四郎兵衛

田中与一右衛門組

一右同断 大河原富太輔

岡 伊八郎組

一右同 菊田奎右衛門組 中濱藤右衛門

菊田奎右衛門組

一右同 竹内五助組 浅田治左衛門

竹内五助組

一金四十五兩 米田忠右衛門

三十人扶持

小頭老人三兩式步三人扶持

部屋預老人 三兩式步式人扶持ツ、

平 老人

三兩式人扶持ツ、 十一人

式兩老人扶持 老人

式步式朱部屋預色々墨代

芥川文左衛門組

一米六拾八石三斗 高野与惣右衛門

式拾七人扶持

七石三斗三人扶持 小頭老人

七石式人扶持 勘定人老人

四石式人扶持 定番老人

五石式人扶持 平拾人

小頭共拾三人

一米七拾三石三斗 佐竹甚右衛門組

式拾九人扶持

七石三斗三人扶持 小頭老人

七石式人扶持 勘定人老人

四石式人扶持 定番老人

五石式人扶持 平拾老人

小頭共拾四人

宮本仁右衛門

米貳拾貳石三斗 曾我久太夫組
九人扶持

成合佐五右衛門

七石三人扶持小頭老人
五石貳人扶持平三人

小頭共四人

鄉足輕

拾六石壹斗
廿五石

鄉足輕小頭八人
鄉足輕貳百五拾人

貳拾五人内

廿一人 野中村
四人 辻子村

中村平七組

貳拾五人内

十五人 川久保村
十人 大沢村

荒木太郎助組

貳拾五人内

十五人 泉原村
三人 錢原村
五人 大岩村

老人 生保村
老人 佐保村

貳拾五人

粟生不殘 五ヶ 岡 仁兵衛組
貳拾八人 粟生村 七人 泉原村

五拾人内

五人 下音羽村 六人 佐保村 五ヶ
老人 千提寺村 老人 安本村 岡
老人 大岩村 老人 車作村 七郎右衛門組

五拾人内

貳拾四人 犬甘野村
三人 寺田村 九人 柚条村
五人 笑路村 三人 湯谷村

六人 神地村
十二人 南掛村 三人 万願寺村
丹波組
長沢喜内組

一貳拾五人内

三人 大槻并村 石田佐太夫組

貳拾五人内

十六人 寺村 丹州
貳人 中村 并河源左衛門組
七人 法貴村

百三拾目老人半扶持宛

外二江戸詰 詰之内老人二て
老人扶持増 相勤候付、半扶持二増
役差四人

拾六貫四百四拾目

江戸株 高槻
老人百匁ツ、中間百拾老人
外二七拾匁村増銀

九百目

老人百目ツ、旅役不仕 中間九人

百七拾目老人半扶持

三御丸掃除人 市平
老人五両貳歩

四拾四兩拾六人扶持

貳人扶持ツ、駕籠者八人

九百目

老人二付七拾五匁ツ、下番拾貳人

百四拾老人扶持

大坂買物役 伊兵衛

一金百八十九兩 上総中間

八拾四人

役差老人貳兩貳歩貳朱

貳人扶持

沖田竹翁

平貳兩壹歩又ハ右之高より少ク申候

老人扶持

小野善右衛門

有之由

老人扶持

武井休弥

右之内

三人扶持

服部祖翁

御下屋敷

九人

五人扶持

西川良助

御中屋敷

貳人

三人扶持

坪井宗三

御廐

八人

貳人扶持

望月孫四郎 妻

一金六兩三步

御下屋敷夜番

三人扶持

小川浅左衛門 後家

三人扶持

代々木下番

老人

三人扶持

涌野嘉内 母

貳兩壹歩

老人

老人扶持

藤井左文 妻

一金九兩三步

厩中間 四人

老人扶持

福田藏右衛門 妻

四人扶持

部屋預老人

金三兩

五人扶持

伴野宗弥

隱居

神谷古曆

老人扶持

廣瀬文蔵娘一人

片岡觀都

佐竹殘築

老人扶持

重崎向当

鷺見遊静

老人扶持

橋本清兵衛 後家

海北遊静

老人扶持

田渕伊兵衛 後家

服部惣左衛門

老人扶持

堀 源助

稻垣忠兵衛

米八斗

茨木我平 母

上野甚之丞

米壹石

刀屋 勘助

竹村仙良

老人扶持

三龜屋 干太郎

牧 矢柄

休足

辻八左衛門

小池治快

休足

入江弥左衛門

栗岡休務

貳人扶持

大橋助右衛門 母

松井産際

五人扶持

大町立徹

三人扶持

老人扶持

中西弥五兵衛 後家

二人扶持

拾人扶持

万屋勘兵衛

● ●

拾人扶持

氷室山 観音寺

● ●

拾人扶持

松崎屋太郎兵衛

● ●

拾人扶持

万屋嘉兵衛

三拾俵	外二餅米四斗	清光院	十人扶持	●	二見屋庄九郎
拾四石	七月四石 極月拾石	悲田院	拾人扶持		河内屋 勘兵衛
米拾俵		岡野屋八兵衛	六斗		五ヶ庄・丹波四箇之内
米五拾俵		熊野屋 彦兵衛	貳石		納米扶持
三人扶持		平野屋 長太郎			番田組もかり
米五拾俵		和田義軒	三石四斗五升		人足扶持
貳拾俵		平野屋 三郎右衛門			類族江被下候
貳拾俵		平野屋 伊兵衛			
六石		多田屋 彦右衛門			
老石六斗	御使者聞船 損料被下候	甲賀 東大寺左衛門			
老石六斗		大塚村	五人扶持		右兩人掛屋 紙屋
三斗六升		大塚町庄屋共江			年番二相勤候 八郎次
拾俵		年号二被下之			先年被仰付候 丹波屋
貳石		高槻村舛取 又左衛門			依之隔年二相勤 仁兵衛
八斗		尼屋 九兵衛	四百石	●	出喜井様
一老石貳斗		枚方本陣 善兵衛	米八拾七石五斗		芳寿院様
老石貳斗	是八馬宿此口付被下	竹屋 十三郎			
八斗		大津屋 庄三郎	貳百石	●	大学様
老石	京都火事表	大塚町庄屋 利左衛門	米貳百俵		於榮様
七俵		日用肝煎五人			
米拾俵		鴻巣 勝願寺	十五人扶持		於東様
米貳拾俵		鹿嶋屋 利兵衛			
三拾俵		橘屋 七左衛門			
貳石貳斗	高槻村庄屋	桔梗屋 伊兵衛	現米貳拾石		阿野女将様
	天川村庄屋	忠左衛門			
	大沢村庄屋	喜左衛門	十人扶持		八重崎殿
百五拾三石四升貳合六夕		三右衛門			
六石八斗「」		村庄屋給			
米五斗 每暮被成下候		浄圓寺	一米百五十石		寿姫様分
三人扶持		大塚村 半三郎	一銀貳貫九百五十匁		御知行米
		柏屋 ●弁吉			女中切符

一十四人扶持 同扶持米
 一金三十兩 御小遣
 一銀六百五十匁 中間切符
 一五人扶持 同扶持方
 一式人扶持 御附衆上之分

米直シ合式万五十三石九斗四升六合
 但シ金六十匁かへ

銀老石二付六十匁かへ積
 内 御出米三十壺石七斗四升三合
 残り御取米貳百二十壺石貳斗三合

知行高 一万四千二百石
 扶持高 千四百九十人半
 金千両五十二両二歩
 銀十九貫九十目
 米四百十石五斗六升
 俵二百廿七俵

ここで取り上げた分限帳は、高槻藩の家老格にあたる高階家に伝来した史料である。前号で概要を述べたが、半横帳形式で、家臣名と役職・家禄を記した短冊状の紙片を貼り付けた台帳である。これは家臣名や役職が代わると、貼り替えたり、追加したりできるようにになっていた。作成年代は未詳であるが、表紙裏に後筆で「宝暦十一年ヨリ（以下略）」や帳面中ほどに「天保二辛卯（以下略）」などの貼り紙があることから、江戸時代中後期にわたって、高階家の手控えに使用されたものと考えられる。●印は、家格として低禄であるが有能で要職に就いた場合に「役料」が支給された者を指す。

さて、今回掲載した部分は、城内において藩主や奥方の身の回りの庶務を司る役職の納戸や右筆、供頭から、足軽組やお抱えの商人、藩主菩提寺まで多岐に及ぶ。

納戸以下、歩行（かち）目附・歩行並までは、天坊幸彦氏の「高槻藩の職制図」(2)において勝手方(奥方)の用人格のグループに属し、御刀番や医師・台所人・料理人・茶道などを担った。歩行並のなかには「坊主組」と称する役職の者が多い。これは一般的に「茶坊主」と呼ばれる職で、藩主の取次ぎや文字どおり湯茶の接待にあたったと考えられる。

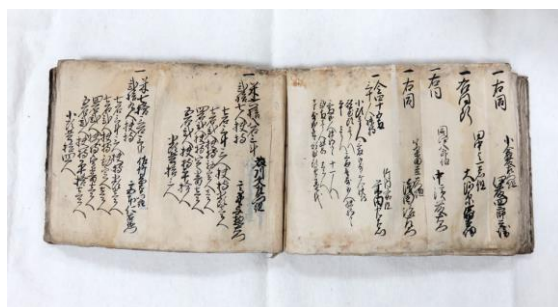
本分限帳では足軽組の編成の記載が詳しい。小森三郎左衛門組や猪瀬浅右衛門組など十六組が存在し、組内は組頭を筆頭に、小頭・勘定人・定番・平で構成されていることがわかる。また、郷足軽も確認できる。郷足軽とは普段は農業に従事し、非常時に足軽として出陣することを想定したものである。藩は領内の村々を六組に区分し年貢の受払いや触書の伝達などを行っていた。郷足軽は組単位で配置し、高槻・上郷・冠・鳥飼・五箇庄・丹波の六組のうち、上郷・冠・五箇庄・丹波の四組に郷足軽を置き、総人数二百五十人であった。

帳末部分では、刀屋勘助や三亀屋千太郎、万屋嘉兵衛など屋号をもつお抱えの商人が複数いたことがわかる。さらに、永井家の菩提寺である悲田院(京都市)や清光院(東京都)、祈祷寺とされた観音寺(高槻市氷室)に扶持米が与えられている。

全体を通じて藩から扶持米を支給された対象者は多岐にわたり、多種の職制が存在したことがわかった。本分限帳が高槻藩の家臣団編成や職制に関する研究の一助になることを期したい。

【註】

(1) このほか、江戸時代前期の高槻藩分限帳については、「高槻藩永井家の分限帳について」(しろあとだより)第6号、二〇一三年三月、高槻市立しろあと歴史館、「史料紹介 高槻藩永井家の分限帳」(御当家古分限帳)について「しろあとだより」第8号、二〇一四年三月、高槻市立しろあと歴史館)で翻刻・紹介した。
 (2) 『高槻市史』第二巻本編Ⅱ(一九八四年、高槻市)。天坊幸彦氏の図示した「高槻藩の職制」(『高槻通史』)を引用する。



高槻藩分限帳：足軽組の記載部分
 (高階家文書、しろあと歴史館蔵)

歌舞伎「名作切籠曙」と「高槻の刃傷事件」について

清水 亜弥

はじめに

歌舞伎「名作切籠曙(めいさくきりこのあけぼの)」は、享和元年(一八〇二)に大坂道頓堀の中芝居で初演された演目である。この「名作切籠曙」は、舞台を京都の伏見と設定しているものの、実は高槻で発生した刃傷事件を元に創作された脚本であった。当時の人々はそれを承知していたが、現代はほとんど上演されない演目であり、その関連性について詳しく触れられることは少ない。本稿では、「名作切籠曙」とそのモデルになったとされる高槻での刃傷事件について、それぞれの先行研究を紹介するとともに、この二つが本当に結びつくのか、また相違点についても考えてみたい。

一 「名作切籠曙」とは

最初に、「名作切籠曙」の登場人物とあらすじを簡単に紹介したい。以下は渥美清太郎編『日本戯曲全集』第九巻による(1)。主な登場人物は、染物屋の娘の樽屋おせん、若殿鷹津左市郎、若党里見伊助である。

樽屋おせんは、奉公に上がった先で若殿に見初められ恋仲となっていた。取り持ったのはおせんと昔馴染みの若党・伊助である。第一幕の「長岡天神社の場」では、おせんが若殿の子を妊娠していることがわかり、伊助はおせんが若殿のもとへ嫁入りできるように尽力することを約束する。また、若殿と許婚の松江姫との結婚を妨害しようとする家臣の策略により、結納の証となる家宝の正宗の刀が所在不明になっており、伊助はこれを見つけ出すように命じられる。

第二幕では、伏見の樽屋を訪れた鷹津家の家老と、おせんの母の会話から、若殿とおせんが腹違いの兄妹であることが判明する。それを聞いた伊助は、知らぬこととはいえ二人の仲の橋渡しをしたことの責任を感じ、おせんを「畜生道へ落ちる罪(兄妹で恋愛した者の罪)」から救うため、盆踊りの会場でおせんを殺害し、自分も自害を遂げて演目は終わる。この時、盃蘭盆会に飾る切子灯籠に隠されていた正宗の刀が用いられるのである。

劇中で、伊助はおせんを殺害する表向きの理由として、自分がおせんに

惚れており、若殿のところへ嫁ぐ前に心中するためだと告げる。こうした部分は、元となった高槻の刃傷事件が、色恋沙汰の怨恨による娘殺しと考えられていたという点を取り入れたものだったと考えられる。

渥美清太郎氏は、「名作切籠曙」の解題(2)で、「その頃、高槻の城下で盆踊りの夜、娘殺しの惨事があって名高かった」と述べ、その事件に他の狂言などから借用した人物名をあてがい、脚色して作られたものとしている。演目が作られた頃と近い時期にあった事件であることは想像されるが、いつ発生した、どのような事件であるという具体的な説明はされていない。渥美氏は、主要人物の一人である「里見伊助」が元々それ以前から存在していた歌舞伎狂言「伏見京橋諍実録」の登場人物であり、名前が似ていることから使用したものと指摘されている。また、おせんを見初めた若殿の名前が「鷹津左市郎」となっているのは、「高槻」を暗示するためであるとしている。なお、「樽屋おせん」は、実在した大坂天満の樽屋の女房で、姦通して自害した人物とされ、井原西鶴の『好色五人女』(貞享三年「一六八六年」刊)で脚色されて世間に広まった。「名作切籠曙」では名前だけを借りているものである。

また、渥美氏は触れていないが、「名作切籠曙」の台本の表書きには、「宝永年中伏見の喧嘩聞たか聞たか月は十六夜」という文句が記されている。この部分も、「高槻」を想像させるためのものだろう。

渥美氏によれば、盆踊りの夜の娘殺しという情景はいかにも歌舞伎の妙所を掴んだ面白い趣向であり、元々夏を舞台にした狂言が少なかったために歓迎され、上方ではほぼ毎年夏に上演されていた。また江戸でも文化十二年(二八一五)六月に市村座で上演されたが、その際には「其噂色聞書(そのうわさいろのききがき)」という題名に変えたという(3)。『大歌舞伎外題年鑑』(4)や立命館大学アート・リサーチセンターが公開する歌舞伎・浄瑠璃等興行年表(5)を見ても、主に大坂や京都の芝居小屋で、主として夏に上演されていたことが裏付けられている。

上方で発行された錦絵、「上方絵」は、多くが役者の芝居姿を描く役者絵であることが特徴とされる(6)。上方で人気の歌舞伎狂言であった「名作切籠曙」の場面を描いた上方絵もみられ、それらについて説明される際には、「名作切籠曙」の元となった高槻の事件について触れられることもある。それは例えば、「享和元年(一八〇二)の前年に起こった、色恋沙汰の

遺恨から盆踊りの群集約七〇人を巻き込んだ大喧嘩」(7)、「おせんという名の娘がお盆の頃に殺された実際の事件をもとにしており」(8)というような簡単な内容となっているが、この高槻での事件とはどういった事件だったのだろうか。先行研究に従い、具体的にその内容を確認したい。

二 盆踊りの夜の刃傷事件

高槻市が発行した高槻の歴史のエピソードを紹介する本『いにしえ物語』の中で、富井康夫氏は享和元年(一八〇二)七月の旧盆に、城下で催された盆踊りの最中に起こった刃傷事件を紹介している(9)。この『いにしえ物語』は、市史編纂の過程で収集された、市内に伝わる古文書などを資料として書かれたものである。

『いにしえ物語』によれば、高槻城東大手門外の外堀東側、本町(高槻小学校の西側)の帯には、外堀に沿って南北に武家屋敷が並んでいたが、その北のほずれの空き地で、享和元年(一八〇二)七月十六日に盆踊りが行われた。しかし深夜子の刻(午前零時)、踊りの輪の中に刀を持った男が突如飛び込んで、相手かまわず斬りかかり、捕縛に向かった警備の足軽らをも切り殺したという。男は郡奉行・関又兵衛配下の足軽で、和助という十九歳の若侍であった。夜明け頃に徒歩目付役・早川鍵次郎が取り押さえ、近くの紙屋八郎次の家の中庭に引き据えるまでに、多くの死傷者が出ていた。警備に当たっていた足軽ら四人が死亡、侍四人・侍の妻女など二人・町民の男四人・女一人の十一人が重傷、侍四人・侍の妻女ら六人、侍の下女二人、町民の男一人、女三人の計十六人が軽傷を負ったという。

動機は「乱心」とされていたが、当時の様子から色恋沙汰の怨恨と考えられていたようである。和助は、武士としての切腹ではなく、罪人として打ち首に処せられた。また、警備に当たって重軽傷を負った足軽全員が解雇となり、死亡した足軽の家族は処分を待たずに長屋を引き払うなど、藩の厳しい処分が行われた事件だったという。

「名作切籠曙」が初演された享和元年(一八〇二)と同年に、盆踊りの夜に起こった群集を巻き込んだの事件という特徴から、モデルとなったのはこの事件ではないかと考えられる。色恋沙汰の怨恨が原因であるとすでに推測されていたが、実際には娘は殺されていない。しかし、怪我を負った被害者の中に女性も多く見られるのは確かである。

三 「高槻喧嘩」の噂

この高槻の城下で起こった刃傷事件は、巷の関心を集めたようである。『南総里見八犬伝』や『椿説弓張月』などで有名な読本作者の曲亭(滝沢馬琴)が、享和二年(一八〇二)五月から八月に上方を旅行した際の紀行文『羈旅漫録』(享和三年「一八〇三年」刊)には、ほら話でよく人を笑わせる斎藤文次という人物のエピソードとして、この事件のことが記されている(10)。

『羈旅漫録』によると、去年七月に高槻の町で、色情の遺恨を晴らそうと盆踊りの群集の中で七十人を殺めた事件があったが、京都ではこの事件の情報がまちまちであった。斎藤文次は「自分は高槻に縁者がいるが、昨日その人に喧嘩のことを聞くと、殺されたのはわずか三人だったといっていた」と語った。これを聞いた人々も、七十人というのはさすがに多すぎるので、ほら吹き文次ではあるが、これは本当のことを言っているのだろうと思った。しかし翌日高槻から人が来たので、喧嘩のことを聞いてみるとやはり被害者は七十人であったというので、みな驚いた、という。

『いにしえ物語』が取り上げた記録では、死傷者は三十一人となっており、七十人という数字とは隔たりがあるが、今も言われている被害者七十人という人数はこの段階ですでに噂として広まっていたことがわかる。またこの話からは、京都にもこの事件が伝わっており、世間でも事件の動機が色恋を原因とする怨恨であると見られていたこと、「高槻喧嘩」と呼ばれていたことがわかる。

四 歌舞伎「名作切籠曙」の上演

享和元年(一八〇二)の高槻城下での刃傷事件と、「名作切籠曙」を結びつける資料がある。文化・文政期(一八〇四〜三〇)に活躍した大坂の狂言作者、浜松歌国が著し、没後に遺稿集の形で刊行された『撰陽奇観』(天保四年「一八三三年」刊)は、元和元年(一六一五)から天保四年(一八三三)までに大坂で起きた出来事を記した年代記・随筆である。この中の享和元年(一八〇二)七月の項には、高槻城下で発生した事件を次のように記している(11)。

一 同月十六日夜 高槻城下の踊り場にて家士の婦女を足軽之者恋の遺恨にて殺害ス 此一件を中之芝居にて名作切籠曙といふ外題にて里見伊介樽屋お仙に取組八月六日初日大當り

ここでは、この事件が「名作切籠曙」という外題(歌舞伎狂言の題名)の芝居になったという記述がある。享和元年(一八〇二)七月十六日に起こった事件を題材に脚本が書かれ、直近の八月六日には上演されていることなるが、浜松歌国は中之芝居の座付作者である奈河晴助の弟子として活動していたことから、記述の信憑性は高いとみられる。

「名作切籠曙」は、歌舞伎の演目の分類では「世話物」に当たる。世話物は、歴史的な事件を取材し、武家や貴族などを中心とする演目「時代物」に対して、江戸時代の町人社会を中心として扱うものをいう。「一夜漬狂言」などとも言い、巷に起きた心中事件や情痴の果ての殺人事件などを直ちに舞台化した。「名作切籠曙」の作者である近松徳三(一七五二〜一八一〇)は、代表作「伊勢音頭恋寝刃」ほか二十編近くの作品が、いずれも現実の事件を題材にした「世話物」であり、驚くほどの速さで書かれた一夜漬狂言であったという(12)。「名作切籠曙」の脚本が、初演の前月に起こった高槻城下の刃傷事件を元に、一夜漬で書かれたと考えても良いだろう。

また、前述の曲亭馬琴『羈旅漫録』(図)では、馬琴が京都滞在中の七月二十四日から始まった四条北の芝居を見物に行った際、切狂言(一日の興行の最後の一幕)が「伏見の喧嘩」を取り上げた新狂言であったと記し、追記でこれは伏見ではなく「高槻喧嘩」を取り上げた狂言であり、この狂言を高槻騒動と言う、としている(13)。享和二年(一八〇二)七月にこの芝居小屋で上演された演目は「名作切籠曙」であり(14)、前述のように馬琴は同書内で「高槻の喧嘩」は昨年七月に起こった事件である、と記していることから、同様のことがいえる。

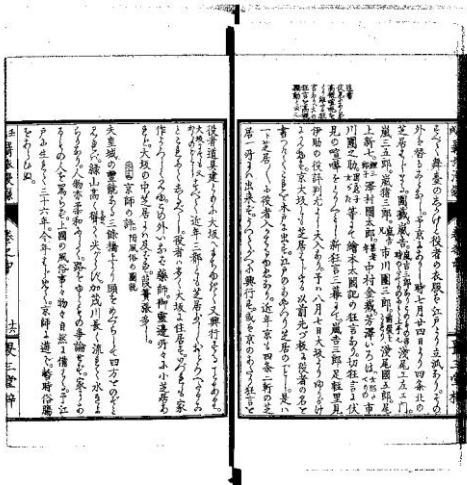


図 曲亭馬琴『羈旅漫録』(国立国会図書館蔵)

歌舞伎「名作切籠曙」の元となったとされる高槻の

おわりに

事件(「高槻喧嘩」とは、享和元年の盆踊りの際に、城下で起こった刃傷事件であることが確認できた。この事件は、高槻でも記録されている実際であった事件であり、「世話物」の演目らしく発生した直後に一夜漬狂言として脚本化され、上演されたのである。

一方で、「娘殺し」「七十人を巻き込んだ」という従来言われていた事件の内容について見ると、現実とは乖離していることも判明した。この違いは芝居として脚色される以前にすでに発生して、人の噂に上っていた可能性もある。「世話物」は実際にあつた事件を題材としていることが特徴とされるが、人々の噂の中で、そして脚本の中で脚色され、よりドラマチックなものとなつていったのだろう。

【註】

- (1) 渥美清太郎編『日本戯曲全集 第九卷』(春陽堂、一九二八年)。
- (2) 同註1。
- (3) 同註1。
- (4) 船越政一郎編『浪速叢書 第十五卷 大歌舞伎外題年鑑』(名著出版、初版一九二七年・復刻一九七九年)。
- (5) <http://www.dh.jac.nippon.ac.jp/kabukiniryu/edonemiyu/default.htm>
- (6) 大阪歴史博物館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『日英交流 大坂歌舞伎展―上方役者絵と都市文化―』(二〇〇五年)、大阪歴史博物館・山口市立萩美術館・浦上記念館『特別展 上方の浮世絵―大坂・京都の粋と技―』(二〇一四年)など。
- (7) 同註6、大阪歴史博物館・山口市立萩美術館・浦上記念館『特別展 上方の浮世絵―大坂・京都の粋と技―』(二〇一四年)。
- (8) 同註6、大阪歴史博物館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『日英交流 大坂歌舞伎展―上方役者絵と都市文化―』(二〇〇五年)。
- (9) 富井康夫『いにしえ物語』(高槻市役所、一九八九年)「本町の三十人斬り」。
- (10) 滝沢馬琴『羈旅漫録 壬戌 中』(畏三堂、一八八五年)。
- (11) 船越政一郎編『浪速叢書 第五卷 撰陽奇観 其五』(名著出版、初版一九二八年・復刻一九七八年)。
- (12) 三善貞司編『大阪人物辞典』(清文堂出版、二〇〇〇年)。
- (13) 同註10。
- (14) 同註5より。

発行日 二〇一六年三月十二日 編集・発行 高槻市立しるあ歴史館

大阪府高槻市城内町一番七号・TEL〇七二(六七三)三九八七

◆ホームページ:高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載

http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html